

『吳騷三集』について

平塚 順良

一、はじめに

これからその價值を論じようとする『吳騷三集』は、管見の限りでは現存しない。しかし、明末に出版された散曲選集の好尚を理解する上で、極めて重要な位置を占めると考えられる。『吳騷三集』は、その書名が示す通り、先に『吳騷集』『吳騷二集』の二書が存在し、また後には『吳騷合編』が編まれ、これらの四書がひとつの系列を形成している。

拙論の意圖は、現存する『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷合編』を利用することで、現存しない『吳騷三集』の復元を試みることにある。『吳騷三集』を復元することによって、まず『吳騷集』から『吳騷合編』に至る、吳騷諸集（以下、『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷三集』『吳騷合編』を總稱して、吳騷諸集と呼ぶこととする）の編纂方針を知ることができ、吳騷諸集に通底する選錄傾向がある一方で、時代の好尚を映した變遷をも、そこに見ることができ、また、『吳騷三集』が、各散曲選集の中でどのような位置を占めるのかも明らかになるだろう。

『吳騷三集』について

二、『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷合編』

『吳騷三集』について論じる前に、まずは現存する『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷合編』の三書について、確認していくことにしたい。

『吳騷集』は、全四巻で、巻一のはじめに王禪登編、張琦校とある。巻首には、陳繼儒「吳騷引」が附されており、そこに「萬曆甲寅秋日」とあることから、『吳騷集』の出版は、萬曆四十二年（一六一四）秋以降、間もなくのことであつたろうと思われる。また、『吳騷集』には、套數七十二套と、小令四十五闋が収録されている。

なお『吳騷集』が王禪登編と冠することについて、疑義を生ぜしめる記事が、凌濛初『南音三籟』に見える。『吳騷集』は卷四に、王禪登「月雲高」二闋を載せるが、凌濛初『南音三籟』は、散曲下・附錄小令に、同作を無名氏の作として載せ、尾注において、

吳騷注以王百穀、非也。百穀與余交、生平未嘗爲曲。

『吳騷』注するに王百穀を以つてす、非なり。百穀余と交はるに、生平未だ嘗て曲を爲らず。

と述べる。百穀は、王禪登の字である。また現存する戲曲作品では、

『全德記』（『古本戲曲叢刊』二集、上海商務印書館・一九五五年）が、王禕登の名を冠するが、「王禕登編輯」となっている點に注意すべきであり、王禕登が曲を作った證據とはなり得ない。このように『吳騷集』が王禕登編と冠することについて、僞托の疑いがあることをひとまず確認しておきたい。

『吳騷二集』³は、全四巻で、巻一のはじめに張琦・王禕編輯とある。巻首に、許當世「吳騷二集序」を附し、そこに「丙辰秋」とあることから、萬曆四十四年（一六一六）秋以降、間もなく出版されたものと考えられる。套數六十三套と、小令百四十三闕を収めるが、そのうち、小令四十闕は附刻作品である。『吳騷二集』は、『吳騷集』に比して、小令の比重が増加していることを、その特徴として指摘できる。

『吳騷合編』⁴は、全四巻で、巻一のはじめに騷隱居士編輯、半嶺道人刪訂とある。騷隱居士は、『吳騷集』・『吳騷二集』の編纂にも攜わった張琦、字は楚叔の別號である。張琦は他にも白雪齋主人の號を用いることがある。また、半嶺道人は、張琦の從弟張旭初の別號である。

巻首には、まず許當世「吳騷合編序」、張琦「吳騷合編小序」、張旭初「跋」を附す。どれも崇禎十年（一六三七）春に書かれたものであり、『吳騷合編』の出版もそれから間もなくのことであつたろうと思われる。

さらに、陳繼儒「序吳騷初集」、許當世「序吳騷二集」が続くが、これらはそれぞれ『吳騷集』巻首の陳繼儒「吳騷引」と『吳騷二集』巻首の許當世「吳騷二集序」を再録したものである。續いて、張旭初「序吳騷三集」があり、このことから現存しない『吳騷三集』の存在

を知ることができる。その序に、

居士號騷隱、復集樂府而弁以騷、良有深意乎。今好事者聞其名號、便覺鬱沈之色都爲振起。且欲即觀其全而未可得。茲復手輯佳本、授剞劂、至再而三。

居士號は騷隱、復た樂府を集め弁ずるに騷を以つてするは、良に深意有るか。今好事者其の名號を聞くに、便ち鬱沈の色も都て爲に振起するを覺ゆ。且つ即ち其の全きを觀んと欲するも未だ得べからず。茲に復た手づから佳本を輯め、剞劂に授け、再びより三に至る。

とあることから、『吳騷三集』の撰者も張琦であつたと思われる。

『吳騷合編』の巻首には、この吳騷初集・二集・三集の序に續いて、「填詞訓」「作家偶評」「曲譜辯」「情癡瘖言」の四曲話を収める。⁵

續いて張琦「凡例」があるが、その中の一條に、
往時選刻吳騷、苦無善本。所行者惟南詞韻選及遶奇振雅諸俗刻、所載清曲、大略雷同。韻選一書、又爲金湯韻學而設、僅惟小令散見、而套數則落落晨星。余特蒐諸殘簡畫餘、零星舊本、及各家文集、積漸羅致。雖已刻者有三集、而所見之詞、不啻廣矣。

往時吳騷を選刻するに、苦だ善本無し。行はるる所の者は惟だ『南詞韻選』及び『遶奇』『振雅』の諸俗刻のみにして、載する所の清曲は、大略雷同す。『韻選』の一書、又た韻學を金湯せんが爲に設くるも、僅かに惟だ小令のみ散見し、而して套數は則ち落落として晨星のごとし。余特に諸れを殘簡畫餘、零星の舊本、及び各家の文集中より蒐め、積漸して羅致す。已刻する者は三集有りと雖も、見る所の詞、啻だ廣きのみならず。

とある。ここでも「已刻する者は三集有り」として、『吳騷三集』へ

の言及が見られる。また、この凡例から、沈璟『南詞韻選』が、小令を中心に編纂されているのに對して、吳騷諸集は、套數の選録に主眼を置いた編纂方針を採っていることが分かる。なおこの凡例の後に、魏良輔『曲律』が続く。

このように『吳騷合編』に附録された「序吳騷三集」や、凡例における言及から、『吳騷三集』の存在を確認することができる。

三、『吳騷三集』の復元

『吳騷合編』は、その書名からも分かる通り、先行する『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷三集』から佳作を選び、かつそれに新收の作品を加えたものである。また題下には已刻・未刻の別が記されており、未刻は『吳騷合編』ではじめて収録された作品を表わす。そして已刻は、『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷三集』から再録された作品であることを示す。また一部、已刻未刻の別を明記しない作品もある。

まず、『吳騷合編』が題下に已刻未刻の別を明記せず、かつ『吳騷集』『吳騷二集』に見られない作品が、套數十八套と小令三闋見られる。これらの作品は、『吳騷三集』に収録されていた可能性を残す。『吳騷合編』で初めて収録された可能性もあり、そのどちらであるかは判断できない。ただしその中で、『吳騷合編』卷三の沈子勻「集賢賓（天涯自他爲去客）」、卷四の陸包山「漁燈兒（沒來絲惹相思）」については、他の散曲集からの言及によって、『吳騷三集』に収められていたことが分かる。このことについては、後に述べる。

『吳騷合編』が未刻と注する作品は、六十三套數と十五小令ある。ただしその中で、卷四に収録される梁辰魚「攤破金字令（芳容並月）」のみは、題下に「未刻」と記されているにも関わらず、『吳騷二集』

卷一に収録されている。

つまり六十二套數と十五小令が、『吳騷合編』で新たに選録された作品であると言える。また十六套數と三小令は、『吳騷合編』の新収なのか、『吳騷三集』からの再録なのか分からない。

『吳騷合編』に収録された作品の中で、『吳騷集』にも見える作品は、四十四套數と十四小令ある。同じく、『吳騷合編』に収録された作品の中で、『吳騷二集』に見える作品は、三十五套數と六十六小令

表一

吳騷集				吳騷二集			
總數		再録數		總數		再録數	
套數	小令	套數	小令	套數	小令	套數	小令
71	45	44	14	63	143	35	66
吳騷三集				吳騷合編			
總數		再録數		新收		未確定	
套數	小令	套數	小令	套數	小令	套數	小令
		42	14	62	15	16	3

ある。

そして、已刻と記されていないが、『吳騷集』にも『吳騷二集』にも見られない作品が、四十套數と十四小令ある。これは『吳騷三集』に収録されていた作品と考えるのが妥當であろう。これに先述の沈子勻「集賢賓（天涯自他爲去客）」・陸包山「漁燈兒（沒來絲惹相思）」の二套を加えると、四十二套數と十四小令を、『吳騷三集』に歸屬させることができる。以上の考證を表一にまとめると上のようになる。

この表一から分かることは、『吳騷合編』が、『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷三集』から、ま

んべんなく再録しており、再録数において偏重の見られないことである。このことから『吳騷合編』は、『吳騷集』の補遺として『吳騷二集』『吳騷三集』を位置付けているのではなく、各集を同等に扱っていることが分かる。

『吳騷集』の収録総数に對する、『吳騷合編』の再録数は、ほぼ五割程度である。同じく『吳騷二集』の収録総数に對する、『吳騷合編』の再録数も、ほぼ五割程度である。このことから、『吳騷合編』は、『吳騷三集』からも五割程度の作品を再録していると推測できるのであり、今回の復元によつて『吳騷三集』の約半分の構成を知ることができるようになったと言えよう。

以下、表二に『吳騷合編』に再録された『吳騷三集』収録作品の一覽を示す。また、『吳騷三集』からの再録か、『吳騷合編』の新収か、未確定の十六套数と三小令についても、参考までに表三として一覽を附す。なお作品の配列は、『吳騷合編』の採る宮調順とした。

表一 『吳騷三集』収録作品

曲牌	初句	作者	注	套數	小令
醉扶歸	效于飛鴛侶天生就	沈伯英	翻北詞已刻	1	
八聲甘州	梨花小雨	杜圻山	白雪齋藏本 已刻	1	
錦纏道	心愜快	楊升庵	已刻	1	
普天樂	閉月容	文三橋	已刻	1	
白練序	沉吟久	關九思	已刻	1	

白練序	相思擔	陳石坡	已刻	1	
泣顏回	東野翠煙消	高東嘉	已刻	1	
好事近	書寄秣陵餘	梁少白	已刻	1	
香羅帶	天寒澤國秋	梁少白	已刻	1	
懶畫眉	落日遙岑淡煙孤	沈伯英	已刻	1	
繡帶引	驀忽地雙眉頓鎖	沈伯英	已刻	1	
十樣錦	秦樓上月明如水	梅禹金	已刻	1	
十樣錦	河橋路征帆初掛	高深甫	已刻	1	
絳都春序	春愁萬結	高深甫	已刻	1	
小桃紅	暗思昔日配春嬌	王元和	已刻	1	
綿搭絮	長空如洗	楊夫人	已刻	1	
山坡羊	碧雲窩水輪初上	駱永叔	已刻	1	
二郎神	人別後	高東嘉	已刻	1	
二郎神	分鸞鏡	楊升庵	已刻	1	
二郎神	銅壺轉	梁少白	有序已刻	1	
集賢賓	登樓倚闌看暮景	沈子勻	已刻	1	
集賢賓	天涯自他爲去客	沈子勻	翻北詞	1	
鶯啼序	梧桐一葉秋已凋	孫百川	已刻	1	
金梧桐	相思借酒消	曹舍齋	已刻	1	

漁燈兒	十二紅	九廻腸	七犯玲瓏	七犯玲瓏	七犯玲瓏	六犯清音	六犯清音	小措大	江頭金桂	二犯江兒水	沈醉東風	步步嬌	步步嬌	金絡索	金梧桐	金梧桐	金梧桐
沒來繇惹相思	雞聲兒啼來孤帳	對燈兒幾番思想	芙蓉翠館仙	琳宮驀地逢	凝粧上翠樓	玄陰鶯發	小窓雲重	暗潮拍岸	最苦是深閨人靜	減盡了花容月豔	海棠花開還未開	月夕花朝成虛度	別鳳離鸞驚時變	瑤臺一絳仙	堪悲宋玉秋	春風蘇小家	漫漫瑞雪鋪
陸包山	吳載伯	孫百川	梁少白	梁少白	楊升庵	何西來	虞交俞	舊詞	騷隱生	陳秋碧	鄭虛舟	劉東生	沈伯英	梁少白	許彥輔	馮千秋	陳秋碧
刻稍異原稿	照墨齋改	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	有序已刻	刻	王百穀改已
1	1							1	1		1	1	1	1	1	1	1
		2	1	1	4	1	1			4							

表三 『吳騷三集』所収の可能性がある作品

瓦盆兒	漁家傲	錦纏道	勝如花	二犯傍粧臺	二犯月兒高	桂枝香	八聲甘州	曲牌
相思到底	玉眞 我只道再到天台訪	滿帆風	從他去春幾更	景淒涼	煙鎖垂楊院	青燈殘夜	冤家聚首	初句
高深甫	王伯良	史叔考	秦冰澳	周秋汀	唐六如	屠長卿	袁晁公	作者
與時刻異	白雪齋藏本	刻依藏稿	白雪齋改刻	白雪齋改本	白雪齋藏本	白雪齋藏本	原稿刻	注
1	1	1	1	1		1	1	套數
					3			小令

集賢賓	夜行船	夜行船	新水令	新水令	新水令	新水令	新水令
憶吹簫玉人何處也	太乙峰頭玉井蓮	缺月風簾碎影篩	碧桃花外一聲鐘	鴛鴦夢斷藕絲鄉	夜窓相對一燈微	半窓殘月夢初醒	
陳秋碧	沈青門	毛蓮石	周秋汀	祝枝山	凌初成	沈青門	
已刻	已刻	已刻	已刻	已刻	有序已刻	已刻	
1	1	1	1	1	1	1	

園林好	常相傍淮南小山	汪伯玉	有跋白雪齋 改刻	1	
夜行船序	翠擁紅遮	周秋汀		1	
畫眉上海棠	鸚鵡報春晴	劉東生	白雪齋藏本 與坊刻稍異	1	
降黃龍	雨細塔墀	沈伯英	譜張宗瑞疎 簾淡月詞	1	
畫眉序	白露破青煙	文三橋	白雪齋刪改 照原稿異	1	
玉芙蓉	紅舒臉上桃	卜大荒	翻北詞	1	
針線箱	萬斛愁等閒堆墀	史叔考	白雪齋改刻	1	
宜春令	燈前恨	高深甫	白雪齋改刻	1	
宜春令	燕臺駿	史叔考	照原稿刻	1	

ちなみに、『吳騷三集』所收作品の中でも、高深甫「絳都春序（春愁萬結）」については、『吳騷合編』卷三に尾注が附されており、

此詞首闕、向刻瑞煙濃、而後復訛甚。今悉查明改刻。較之舊本、可謂各得其所矣。頗爲稱快。

此の詞の首闕、向きに「瑞煙濃」と刻し、而後も復た訛り甚し。今悉く查明し改刻す。之を舊本に較ぶれば、各おの其の所得と謂ふべし。頗る稱快を爲す。

とあり、『吳騷三集』では、首曲が「絳都春序」ではなく、「瑞煙濃」となっていたことや、『吳騷合編』所收のものとは文字の異同がある

ことなどが分かる。

四、馮夢龍『太霞新奏』における『吳騷三集』への言及

ここまでを確認した、『吳騷三集』に關する言及は、『吳騷合編』に附された張旭初「序吳騷三集」と張琦「凡例」のみであった。『吳騷合編』だけにしか『吳騷三集』への言及が見られない場合、例えば『吳騷合編』を編纂する際に、先行する書物が初集・二集のみで合編を名乗るのでは箔が付かないと考え、三集を捏造した可能性も否定できない。『吳騷三集』の實在を確認するためには、『吳騷合編』の編纂者でない人物からの言及が、是非とも必要である。

まず凌濛初『南音三籟』には、いくつか「吳騷」に對する言及がみられるもの^①、すべて『吳騷集』『吳騷二集』を指すものであり、『吳騷三集』を指すと考えられるものはない。

馮夢龍『太霞新奏』は、全十四卷で、卷一から卷十三までに套數を收め、卷十四に小令を收める。卷首には、顧曲散人こと馮夢龍による天啓七年（一六二七）の序がある。この『太霞新奏』には、四か所「吳騷集」への言及が見られる。この四か所について、順に確認していくこととしたい。

(一)、陸包山「漁燈兒（從那日惹相思）」の尾注

まず『太霞新奏』卷三は、陸治、字は包山の「漁燈兒（從那日惹相思）」を載せるが、その尾注に次のようにある。

世所傳李日華西廂記有漁燈兒一套、蓋卽王實甫北詞而被之南聲者。九宮譜舊所不載。第其詞音調悽惋、人喜歌之。偶閱吳騷集擬有闕

怨一套、刻陸包山。而詞亦流利、恨兼用齊微支思二韻。後見墨憨齋改本、悉去借韻、復調平久、毫不戻噪。洵可快也。亟爲傳之。

世に傳はる所の李日華『西廂記』に「漁燈兒」一套有り、蓋し王實甫の北詞に即きて之に南聲を被る者なり。『九宮譜』の舊と載せざる所なり。第だ其の詞の音調悽惋たり、人喜びて之を歌ふ。偶たま『吳騷集』を閲するに擬すに聞怨一套有り、陸包山と刻す。而して詞も亦た流利、恨むらくは齊微・支思の二韻を兼用せり。後に墨憨齋の改本を見るに、悉く借韻を去り、復た調も平久にして、毫も噪に戻らず。洵に快かるべし。亟ち爲に之を傳へん。

この陸包山「漁燈兒」は、『吳騷集』『吳騷二集』に見られない。つまりこの尾注に言う『吳騷集』とは、『吳騷三集』を指すと考えられる。

これにより、馮夢龍、別號墨憨齋が、『吳騷三集』に収録されていた陸治「漁燈兒」を見て、これに添削を加え『太霞新奏』に収録し、またこの尾注を附したという経緯を知ることができる。『吳騷三集』に収録されていたはずの陸治「漁燈兒」の原作は、『吳騷三集』が現存しない今では見ることができない。このように『太霞新奏』に、『吳騷三集』への言及が認められることから、『吳騷三集』の出版は、天啓七年（一六二七）の序を持つ『太霞新奏』に先立つと考えられる。なお、『吳騷合編』巻四は、この『太霞新奏』所收の陸治作・馮夢龍改「漁燈兒」を載せ、かつ右の尾注をも引用する。題下の注には、「照墨憨齋改刻稍異原稿（墨憨齋の改刻に照る。稍や原稿と異なる）」とあり、已刻未刻の別を明記していないが、以上の考證により、『吳騷三集』に陸治「漁燈兒」の原作が収められていたことは明らかである。

また、このことから『吳騷合編』が、『太霞新奏』を参照していた事實が分かり、『太霞新奏』の出版が、『吳騷合編』に先立つこともはっきりとする。

『吳騷合編』が、『吳騷三集』所收の原作陸治「漁燈兒」を引かずに、『太霞新奏』所收の陸治作・馮夢龍改「漁燈兒」を引くところから、明末曲壇における馮夢龍の影響力を指摘することもできよう。

(二)、沈伯英「繡帶引（鶯忽地雙眉暗鎖）」の尾注

『太霞新奏』巻七に載せる、沈璟、字は伯英「繡帶引（鶯忽地雙眉暗鎖）」の尾注には、

尾聲依吳騷集改本。

尾聲は『吳騷集』改本に依る。

とある。この沈伯英「繡帶引」も、『吳騷集』『吳騷二集』に見られず、この尾注が指摘する『吳騷集』は、すなわち『吳騷三集』を指すとみなすことができる。原本にあつた尾聲の曲文を、『吳騷三集』改本に做つて改めたことを示す注である。この沈伯英「繡帶引」は、『吳騷合編』巻二に再録されており、題下の注にも「已刻」と記されている。

(三)、沈子勺「集賢賓（天涯自他爲去客）」の尾注

『太霞新奏』巻十所收の、沈瓚、字は子勺「集賢賓（天涯自他爲去客）」の尾注に言うには、

此套萃雅三籟借作楊斗望。吳騷又借作李日華。

此の套「萃雅」「三籟」借りて楊斗望と作す。『吳騷』も又た借りて李日華と作す。

とある。『吳歛萃雅』元集は、本套を楊斗望の作として載せ、また『南音三籟』散曲下巻も作者を楊斗望として本套を載せる。この作は、『吳騷集』『吳騷二集』に見られないことから、『吳騷三集』に李日華の作として収録されていたことが分かる。

『吳騷合編』卷三は、本套を、沈子勺の作として収めることから、『太霞新奏』の説に従つて改めた可能性がある。題下の注には、「翻北詞」とあり、已刻未刻の別を記さないが、この『太霞新奏』の尾注を根據として、『吳騷三集』に収められていたと斷定することができ

(四)、沈青門(張伯起改)「集賢賓(梧桐露冷生嫩黃)」の尾注

『太霞新奏』卷十は、「集賢賓(梧桐露冷生嫩黃)」一套を収め、沈仕(字は青門)の原作に、張鳳翼(字は伯起)が手を加えたものとする。その尾注には、

吳騷評云、此曲前四闋散見青門唾窓絨內。皆佳句也。偶得敲月軒詞稿、見伯起先生此作、續而成套。誠如貫明月之珠、合苕華之璧矣。

『吳騷』評して云はく、此の曲の前四闋青門の『唾窓絨』内に散見す。皆佳句なり。偶たま『敲月軒詞稿』を得、伯起先生の此の作、續けて套を成すを見る。誠に明月の珠を貫き、苕華の璧を合するが如し。

とある。本套とこの評語は、『吳騷二集』卷三に見える。『吳騷合編』卷三にも再録されているが、その尾注は、張旭初により書き改められており、

此曲前四闋散見青門唾窓絨內。予兄楚叔托名伯起、續而成套。誠如貫明月之珠、合苕華之璧矣。予兄精於曲學、凡吳騷舊本所載某

某改刻、除江東白苧詞外、皆其手筆。

此の曲の前四闋青門の『唾窓絨』内に散見す。予の兄楚叔名を伯起に托し、續けて套を成す。誠に明月の珠を貫き、苕華の璧を合するが如し。予の兄曲學に精しく、凡そ『吳騷』の舊本に載せる所の某某改刻、『江東白苧』の詞を除いての外は、皆其の手筆なり。

とあり、張琦が、張鳳翼に假託して、沈仕の小令四闋をもとに套數を作つたと言うのである。

本論からははざれるが、この記事によるならば、この套數の前四闋は、沈仕の小令のはずである。『全明散曲』は、『南詞韻選』を根據として、首曲の「集賢賓(梧桐露冷生嫩黃)」のみを、沈仕の作として一三五八頁に載せ、他の三闋「集賢賓(記別時話兒都是盞)」「黃鶯兒(消瘦杜韋娘)」「黃鶯兒(砧韻度東牆)」については、採らない。この記事を根據として、沈仕の作として収録すべきであろう。さらに本作は、套數としても、張琦・張鳳翼のどちらの名のもとにも採られていない。ひとまず張琦の作として採録し、『吳騷二集』『吳騷合編』の尾注を參考として掲げるべきだ。

以上、馮夢龍『太霞新奏』には、『吳騷二集』への言及が一か所と、『吳騷三集』への言及が三か所あることを確認した。『太霞新奏』の記事を參考することによって、『吳騷合編』が已刻未刻の別を注記しない二作品について、本来『吳騷三集』に収められていた作品であったことを明らかにできた。また、『吳騷三集』が、『太霞新奏』に影響を與えていた事實についても確認することができた。

五、『吳騷三集』の體裁について

ここまで、『吳騷合編』に再録された作品を整理することで、『吳騷三集』の復元を試みた。その結果、『吳騷三集』の原貌を五割程度復元できたものと考えられる。では、復元された『吳騷三集』から、一體どのようなことが言えるだろうか。『吳騷三集』には、どのような特徴があつたのかを、考えてみることにしたい。

まず作品の配列の仕方について考えたい。『吳騷集』『吳騷二集』は、作品の配列に一定の法則を見いだせない。一方、『吳騷合編』は、張琦の「凡例」に、

歌先審調。不知何調、音律亂矣。茲選照譜所序宮調分列各宮。正曲居先、犯調列後。而南北調以及北調附列終篇。俾知音者便於查覈。

歌は先ず調を審かにす。何れの調かを知らざれば、音律亂る。茲の選は譜の序する所の宮調に照らして各宮に分列す。正曲は先に居り、犯調は後に列す。而して南北調より以つて北調に及ぶまで終篇に附列す。知音の者をして查覈に便ならしむ。

とあるように、宮調順に作品を配列する。では、『吳騷三集』は、どのように作品を配列していたのだろうか。

この問題を解く手がかりとして、『吳騷合編』巻四・「附録譜内新增體竝各宮花犯曲」に收められている舊詞「小措大（暗潮拍岸）」に注目したい。本作は、題下に「已刻」とあるのにも関わらず、『吳騷集』『吳騷二集』に收められていないため、『吳騷三集』に收められていただろうと思われる作品のひとつである。この作品は、首曲「小措大」の下に注が附されており、そこに、

此調向收仙呂。今照譜刻。

『吳騷三集』について

此の調向きに仙呂に收む。今譜に照らして刻す。とあり、本作が『吳騷三集』では、仙呂調の部分に收められていたことが分かる。このことから『吳騷三集』は宮調順に作品を配列していたと考えられる。

これより、作品の配列は、『吳騷集』『吳騷二集』では無秩序であつたのが、『吳騷三集』から宮調順の配列を採るようになり、それが『吳騷合編』にも受け継がれたことが分かる。

また先に引いた張琦「凡例」にもあつたように、『吳騷合編』は、巻四「附録北調」に、北曲套数を収録する。『吳騷集』『吳騷二集』は、南北套数については、収録するものの、北曲のみで構成された套数は収録しない。一方、『吳騷三集』は、表二で言えば、祝枝山「新水令（鴛鴦夢斷藕絲鄉）」以下、少なくとも五套の北曲套数が収録されていたようである。こうした北曲套数を収録する方針も、『吳騷三集』に始まり、『吳騷合編』に繼承された特徴であると言える。

このように書物の體裁という観点から見た場合、『吳騷二集』と『吳騷三集』との間で大きな轉換が見られ、『吳騷合編』は、『吳騷三集』の體裁を引き継いでいると言える。

六、『吳騷三集』の作品収録傾向

前章において、『吳騷三集』の體裁について、ある程度明らかにすることができた。次に、『吳騷三集』の作品収録の傾向について、考えてみることにしたい。『吳騷三集』は、何を『吳騷集』『吳騷二集』から受け継ぎ、そしてまた、『吳騷合編』へと到る経路でどのような役割を果たしたのだろうか。

(一) 『吳騷集』『吳騷二集』との比較

まず『吳騷集』『吳騷二集』から、『吳騷三集』へとどのような特徴が受け継がれているのかについて考えてみたい。

『吳騷集』は、収録作品を人名別に集計した際、突出して収録数の多い人物は存在しない。その中でも比較的多い例としては、「古調」と記された十套數・四小令や、沈仕の八套數・十五小令、陳鐸（字は大聲、號は秋碧）の六套數などを擧げることができる。『吳騷集』が収録する作品の多くは、先行する散曲集、沈璟『南詞韻選』・陳所聞『南宮詞紀』などにも收められる、知名な散曲作家のものである。

『吳騷二集』には、梁辰魚の套數二十套と小令十四闕とが收められ、『吳騷集』に四套數しか收められていなかったのに比して、^①にわかにかにその作品數が増大する。『吳騷二集』収録作品を人名別に見た際、梁辰魚の次に多いのが、陳鐸の三套數・二十小令と、沈仕の三套數・十二小令であるから、その差は歴然としている。

梁辰魚の散曲は、『南詞韻選』『南宮詞紀』などにも多く引かれることから、『吳騷集』が編纂された時点で、すでに一定の評価を得ていたものと思われる。決して『吳騷集』から『吳騷二集』にかけての二年度の期間に、梁辰魚の名聲が急速に高まったわけではない。

『吳騷集』と『吳騷二集』とでは、梁辰魚の扱いに顯著な差が見られるが、すでに定評のある人物の作品を中心に選録すると言う點は、共通する。

『吳騷三集』には、梁辰魚の四套數・二小令、陳鐸の二套數・四小令、沈仕の二套數が少なくとも收められていたと考えられ、こうした名人の作を収録する傾向は、『吳騷集』『吳騷二集』から『吳騷三集』へと繼承されていると言えよう。しかし、『吳騷三集』はその一方

で、許彥輔「金梧桐（堪悲宋玉秋）」・陳石坡「白練序（相思擔）」・駱永叔「山坡羊（碧雲窩水輪初上）」など、『吳騷合編』によって現在に一套のみが傳わる、素性の知れない人物の作品をも含んでいる。これらの人物は、撰者と私的な交流があり、その緣故によって『吳騷三集』に選録されたのではないかと疑われるが、確證はない。『吳騷三集』は、名人の作と並んで、こうした無名の人物の作品を選録する點が、『吳騷集』『吳騷二集』とはやや性質を異にする。

(二) 『吳騷合編』との比較

つぎに『吳騷三集』と『吳騷合編』とでは、作品選録の傾向について、どのような差異があるのかについて考えたい。まずは『吳騷合編』の新收作品にみられる傾向について考えてみよう。『吳騷合編』の新收作品の中で、最も大きな比率を占めるのは、王驥徳、字は伯良の套數十三套である。

王驥徳には、現存しない『方諸館樂府』という散曲集があつたことが、彼の『曲律』卷四・雜論第三十九下に、

宋詞見草堂詩餘者、往往妙絕、而歌法不傳、殊有遺恨。予客燕日、亦嘗即其詞爲各譜今調、凡百餘曲、刻見方諸館樂府。

宋詞の『草堂詩餘』に見ゆる者は、往往にして妙絶たれども、歌法傳はらず、殊に遺恨有り。予燕に客すの日、亦た嘗て其の詞に即きて各おの今調を譜すことを爲し、凡そ百餘曲、刻して『方諸館樂府』に見ゆ。

とあることから分かる。また同じく『曲律』に附された毛以燧の「跋」に、

乃最所意得則有方諸館樂府二卷、悉散套與小令、家繕部兄方爲嗣

之金陵。

乃ち最も意得する所は則ち『方諸館樂府』二卷有り、悉く散套と小令となり、家の繕部兄方に爲に之を金陵に勵す。

とあることから、毛以燧の兄、毛以燧が、金陵において『方諸館樂府』を刻したことが分かる。また、『曲律』に、『方諸館樂府』刊行に關する記事が見られると言ふことは、『方諸館樂府』の出版は、『曲律』の刊行に先立つ。

徐朔方「王驥德呂天成年譜」(『晚明曲家年譜』浙江卷、浙江古籍出版社・一九九三年)によれば、王驥德は天啓三年(一六二三)に、八十二歳で亡くなっている。王驥德『曲律』には、馮夢龍の序があり、そこに「天啓乙丑春二月既望」と記されていることから、王驥德の没後二年、天啓五年(一六二五)に『曲律』は出版されたようだ。天啓七年(一六二七)の序を持つ『太霞新奏』の出版は、『曲律』刊行の二年後に當たる。

現存する散曲選集を見る限りでは、王驥德の散曲作品を評價する機運は、馮夢龍の『太霞新奏』に始まると言つてよい。『太霞新奏』には、王驥德の套数が三十九套と、小令二十八闋が收められている。

『太霞新奏』に續いて、『吳騷合編』が、王驥德の十三套数を新たに收めるが、選録された作品は、『太霞新奏』とすべて重なる。『吳騷合編』が、馮夢龍『太霞新奏』から強い影響を受けていることは、『吳騷合編』が馮夢龍の套數六套を新收することからもうかがえる。以降、順治十二年(一六五五)の序を持つ沈自晉『南詞新譜』にも、王驥德の作が引かれている。

王驥德の散曲作品は、この三書によつて現在に傳えられているものがすべてである。以上のことから、王驥德『方諸館樂府』は『曲律』

よりも先に刊行されたものの、その受容が進んだのは、『曲律』が出版されて以降のことであると考えられる。王驥德は、まず『曲律』によつて、その曲論が評價を受け、續いて實作にもその受容が及んだという構圖である。

ここで復元した『吳騷三集』の収録作品に目を移してみると、王驥德の作品はひとつも含まれていないことが分かる。しかし、『吳騷合編』卷二「漁家傲(我只道再到天台訪玉眞)」は、題下に已刻未刻を記さないため、『吳騷三集』からの再録である可能性も否定できない。また、『吳騷合編』が再録しなかつたものの中に、王驥德の作品が含まれていた可能性もあろう。

ただし『吳騷合編』が収録する王驥德の作は、『太霞新奏』収録作の範圍を出ない點に注意すべきだ。王驥德の作品に限つて言えば、『吳騷合編』は、『太霞新奏』の屋下に屋を架したようなもので、選録に新味がない。もしも『吳騷三集』が、先鞭を付けて王驥德の散曲を選録していたとするならば、それは撰者の手元に『方諸館樂府』があつたことを意味する。それならば、『吳騷合編』を編纂する際にも、『方諸館樂府』の中から自由に作品を選択し、独自の見識を示すことが可能だつたはずであり、わざわざ『太霞新奏』所收作品の範圍内に納まる必要性はないはずだ。よつて、『吳騷合編』所收の王驥德の作品は、『太霞新奏』に來源を持ち、『吳騷三編』に、王驥德の作品は収録されていなかつたものと考えられる。

このように『吳騷合編』の新收作品の選録傾向は、『吳騷三集』からの影響よりも、『太霞新奏』からの影響が強いと言へる。

七、おわり

ここまで『吳騷集』『吳騷二集』『吳騷合編』を利用することで、現存しない『吳騷三集』を復元しようと試みた。復元に際して、馮夢龍『太霞新奏』に見られる言及をも参照することで、加えて二套數を『吳騷三集』収録作品であると確認することができた。結果として、『吳騷三集』のおよそ五割を復元することができ、収録されていた四十二套數・十四小令の内容を知ることができるようになった。

また『吳騷三集』は、宮調の順に作品を配列していたことが分かった。これは、『吳騷集』『吳騷二集』の無秩序な作品配列からの、大きな變化であり、『吳騷合編』が宮調順に作品を配列するのは、『吳騷三集』から繼承された方法であることが分かった。

また、『吳騷集』『吳騷二集』は、南北套數については収録するものの、北曲套數は収録していなかった。ところが『吳騷三集』からは、北曲套數をも収録するようになり、『吳騷合編』も『吳騷三集』のこの方針を受け継ぎ、北曲套數を収録する。

『吳騷諸集』に共通して見られる選錄傾向としては、陳鐸・沈仕・梁辰魚など、散曲の名家としてすでに定評のある人物の作品を多く収める。ただし『吳騷三集』は、それに加えて全く無名の人物の作品を選錄している。おそらく撰者と私的な交流のあつた人物ではないかと疑われるが確證はない。

また『吳騷三集』には、王驥徳の作品は収録されておらず、『吳騷合編』が王驥徳の套數十三套を一舉に新収するのは、『太霞新奏』の影響による。『吳騷合編』の新収作品には、『吳騷三集』よりも、『太霞新奏』からの影響のほうが色濃く見られる。

このように、『吳騷三集』を復元することにより、『吳騷諸集』がどのような過程を経て、繼承・發展していったのかを詳細に知ることができるようになった。また馮夢龍『太霞新奏』に、『吳騷三集』への言及が三か所見られることが明らかになり、『吳騷三集』が、後續の散曲選集へ與えた影響についても、窺い知ることができるようになった。

注

- (1) 『吳騷集』は、日本國內では、大谷大學圖書館神田文庫と、京都大學文學部圖書館にそれぞれ所藏されている。
- (2) 套數と小令の區別について、尾聲を用いるものを套數に數えたほか、尾聲を用いないが、一韻到底するものについても套數として算入した。
- (3) 『吳騷二集』は、日本國內では、大谷大學圖書館神田文庫と、立命館大學圖書館西園寺文庫にそれぞれ所藏されている。神田文庫本は、西園寺文庫本よりも後印である。というのは、西園寺文庫本は、卷二に梁辰魚「畫眉序（金風動南國）」一套、馮惟敏「桂枝香（容光消瘦）」ほか小令四闕を載せる。神田文庫本は、この部分が清河漁父「步香詞」二套に差し替えられており、また目次も改竄されている。上述の「畫眉序」一套・「桂枝香」四闕部分の版木が失われてしまったための處置であろう。
- 『全明散曲』（齊魯書社・一九九四年）が使用したのも、神田文庫本と同じ後印本であることが、四二二三頁に『吳騷二集』を典據として清河漁父「步香詞」二套を載せることから分かる。また『全明散曲』が、上述の「畫眉序」一套・「桂枝香」四闕の校勘に、『吳騷二集』を用いていることも、後印本のみを用いている證據となる。
- (4) 『吳騷合編』は、『四部叢刊續編』（上海商務印書館・一九三四年）第二六〇五〜二六〇八冊に、崇禎刊本が影印されている。

(5) 許當世「吳騷合編序」の末尾には、「丁丑仲春」とあり、張琦「吳騷合編小序」の末尾には、「崇禎丁丑春仲」とある。また、張旭初「跋」の末尾には、「丁丑花朝」とある。

(6) この四つの曲話は、作者を記さないが、例えば『中國古典戲曲論著集成』四（中國戲劇出版社・一九五九年）は、『吳騷合編』が張琦の編であることを理由に、曲話の作者も張琦であるとす。

(7) 『中國古典戲曲序跋彙編』（齊魯書社・一九八九年）四五四頁や、『歷代曲話彙編』明代編第三集（黃山書社・二〇〇九年）三五八頁は、『遼奇振雅』でひとつの書名ととらえる。しかし、李一氓『一氓題跋』（三聯書店・一九八一年）に、曲選『樂府遼奇』への言及が見られる。また、『樂府遼奇』は、名古屋大學文學部圖書館に現存する。『遼奇』とはこの書物を指すものと考えられる。ただ「振雅」の二字を含む曲選は、管見の限りでは現存しないようである。ここでは、『遼奇』と『振雅』、ふたつの書名としてとらえることとする。

(8) 沈璟『南詞韻選』は、『紅蕖記 南詞韻選 附吳江三沈年譜』北海出版社・一九七一年によって、鄭騫が校點を施したのを見ることができ。呂天成「義俠記序」に、「先是世所梓行者、惟紅蕖十孝分錢埋劍雙魚凡五記、及考訂琵琶南曲全譜南詞韻選。…萬曆丁未中秋日（先には世に梓行せらるる所の者は、惟だ『紅蕖』『十孝』『分錢』『埋劍』『雙魚』の凡そ五記、及び『考訂琵琶』『南曲全譜』『南詞韻選』のみ。…萬曆丁未中秋日）」とあることから、『南詞韻選』の刊行は、萬曆三十五年（一六〇七）年以前である。

(9) 葉德均「康熙刻本南音三籟」（『戲曲小說叢考』中華書局・一九七九年）は、『南音三籟』に見られる「吳騷」への言及を、すべて抜き出している。ただし、『吳騷二集』を見ないまま論述を進めているため、十分な結果を得られていない。

『吳騷三集』について

(10) これらの作品の中には、他の散曲集では、他の作者のの名のもとに収められているものがある。こうした互見問題については、『全明散曲』の校記に詳しい。拙論では、その書物が誰の作と見なしているのかが重要であり、互見問題には言及しない。

(11) 『吳騷集』が収める梁辰魚の四套数のうち、「步步嬌（小曲幽坊重門啓）」については、作者名が目次では王雅直となっており、本文中では梁辰魚となっている。ちなみに『全明散曲』二二〇頁は、『江東白苧』を典拠として、梁辰魚の作とする。

(12) 清・徐達源『（嘉慶）黎里志』卷八・人物に、「毛以燿、字允奎。…累遷至雲南按察司副使漕儲道。…弟以燿（毛以燿、字は允奎。…累遷して雲南按察司副使漕儲道に至る。…弟は以燿）」とある。

(13) 『吳騷合編』に、『太霞新奏』からの強い影響がうかがえることは、艾立中「論《吳騷合編》與萬曆至崇禎散曲觀轉變之關係」（『浙江藝術職業學院學報』第六卷第四期・二〇〇八年十二月）にも指摘がある。

本研究は JSPS 科研費 26870708 の助成を受けたものです。